



関羽雲長

ブラック★サワ

敵将の華雄が大軍を率いて急襲して来る。居並ぶ名のある武将たちは蒼白になる。華雄は次々と味方の陣を突破する。この本陣も危ない！

「だれか華雄を討ち取れる者はいないのか！」

そのとき、まだ全く無名だった関羽雲長が名乗りを挙げた。

見上げるような威丈夫。威風堂々とした猛々しい風貌。幹部たちは目を見張った。

しかし官職を聞けば足軽ではないか。皆は激怒した。

「控えろ！」

肩書きで判断し、その人物の実力を見ようとししない。今も昔も変わらない人間の悪い癖だ。しかし参謀の曹操は違った。

関羽の姿。とても世の常の人物とは思えない面魂。それに、この状況で名乗りを挙げるからには、よほど腕に自信があるのだろう。

乱世である。野に豪傑が隠れていても何ら不思議はない。曹操は関羽の出陣を許した。

関羽は馬にまたがり、敵陣に突入。

「華雄やある！」

雑兵を蹴散らし、真っすぐに敵将華雄に向かう。

「・・・・・・・・」

戦場がしんと静まり返ってしまった。それもそのはず、足軽が総大将級の華雄を一撃で倒してしまったのだ。

華雄の首を持って本陣に帰って来た関羽。曹操は、酒を豪快に飲みほす関羽の姿を見て、戦慄した。

「恐ろしい男よ・・・」

華雄破れて、ついに最強の呂布が登場した。まさに鬼神。鎧袖一触にも当たらない。呂布がゆくところ、屍の山が築かれていく。戦うために生まれて来た根っからの武人だ。

しかし、この呂布を押さえたのも、やはり無名の足軽である張飛だった。

肩書きと実力が比例しているとは限らない。学歴や有名などで人を見ると、大魚を逃す。

現代も乱世である。全く無名の庶民の中に、関羽や張飛のような大豪傑が紛れているかもしれない。

また、自分自身が大志を抱き、高い理想に燃えて生きることが自由なのだ。

吉川英治著『三国志』は、次々に英雄・豪傑が登場する。そして大文豪の剣のごとき筆で、その人物の人間的魅力が、詩的に、劇的に描かれていく。

関羽、張飛、劉備、孔明、趙雲、陸遜、曹操、呂布・・・。

三国志の登場人物は、生き方のお手本になると同時に、教訓にも満ち溢れている。

なかでも関羽は素晴らしい。

天下を治める腕を持ちながらも、自分が天下を取りたいとは一度も思わなかった。ただひたすら主君を守る。主君の劉備玄德の理想を実現する。この一点に生涯を捧げた。

その義に生きる類稀な生き方に、私は魅了された。

もともと塾の先生だった関羽は、学問を愛する文武両道の豪傑である。だが気性が激しく、プライドはチョモランマよりも高い。冷静沈着な面もあるが、誇りに触れたら最後、首が飛ぶ。関羽は張飛に負けない猛虎のような男なのだ。

関羽の千里行。五つの関所の番人をすべて血祭りに上げて五関を突破した関羽。

三国志の名場面はいくつもあるが、真偽は重要ではない。そこから何を学ぶかが大事だと思って読んでいる。

人生にも突破しなければならない難関がある。そのときに関羽の五関突破を思い起こし、勇気を奮い起

こす。

これほどの関羽が主君と慕う劉備玄德とは、どんな人物か。劉備は良民の幸福を第一に考える、乱世では稀な人格者だった。だから多くの英傑が劉備のもとに馳せ参じた。

覇道の曹操も、関羽を欲しがった。武人を愛する情熱家の曹操は、関羽を心底自分の片腕にしたいと熱願した。

敵からも尊敬される人間になれ！

関羽を見ていると、そんなメッセージが聞こえてくる。

三国志はもちろんのこと、関羽一人を語るにも、語り尽くせない思いが胸中に燃えている。

「吉川三国志」は自分の人生に多大な影響を与えた一書である。